旧紅茶プランテーション農園に生きるタミルの人々と住まい：労働者長屋の成立と物理的実態について

前田昌弘

1. はじめに：紅茶農園の労働者長屋に着目する意義

インドの南東の島国・スリランカにおいて紅茶は永らく輸出量世界一、二を争う主要生産物であり、南アジアにあって高い社会保障水準を誇る同国の発展を支えてきた。しかし、近年は特にイギリス植民地期（1815-1948）の 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて導入されたプランテーション方式 [1]による農園において生産性が低下し、国際的な競争力も低下している。紅茶プランテーション農園はスリランカ（北海道の 8 割ほどの面積）全土に約 460 箇所あり、その大部分は国土中央の中高地地帯に分布する。農園で暮らすのは、紅茶プランテーションの導入期に労働者として南インドから移り住んできたタミル人である。彼らは紀元前後にインドからスリランカに渡来したタミル人（スリランカ・タミル）とは区別され、インド・タミルと呼ばれる [2]。

紅茶プランテーション農園は、その設立の背景と歴史を反映し、外部世界から永らく隔離されてきた。農園で暮らすタミル人の生活は農園主によって包括的に管理されてきた。また、移動の自由も制限され、国による社会保障から取り残されてきた。しかし、近年は状況が変化し、農園で暮らすタミル人への社会保障を強化する計画が国によって推進されている [3]。そこには国の基幹産業である紅茶産業の貴重な労働力であるタミル人を農園に留めておこうとする管理・経営側の意図がみられる。

紅茶プランテーション農園に暮らす人々の多くは（国の統計［DCS2009］によると約 56.1％）、“Line House”と呼ばれる長屋に居住している（図 1）。長屋はイギリス植民地時代に建設されたものであり、築 100 年を越えるものも珍しくない。上述した国による計画の中では、住環境の改善が社会保障の一つの重要な柱である。長屋の多くは老朽化しており、計画の中ではその“劣悪な環境”（狭く、不衛生でプライバシーがない）と居住者の健康への“悪影響”が強調されている。政府は長屋を撤去し、新たに供給した住宅への住み替えを奨励している。

しかし、農園の長屋に暮らすタミル人にとって、住み慣れた土地と住居を離れるこ

図 1 紅茶農園の労働者長屋（Kandapola 村, Nuwara Eliya,中部州）

とは簡単なことであろうか。彼らは植民地支配、独立後の無国籍問題、内戦時の不当な暴力など、スリランカという国の複雑な歴史に常に翻弄されながらも農園に暮らし、長屋は常に彼らの人生とともに在り続けてきた。管理・経営者側からみた「労働者」としての側面だけでなく、農園に暮らしてきたタミル人の「生活者」としての側面にも光が当たるべきではないか。このことが本稿の問題意識であり、本稿では特に、生活の基盤の一つである住居（長屋）とタミルの人々の関わりに注目する。

スリランカの紅茶プランテーション農園についてはこれまで、その成立と歴史（［Weatherstone1986］［Breckenridge2001］等）、農園の社会状況（［中村 1975］,［鈴木 2008］,［栗原 2014］等）、あるいは教育、カースト、ジェンダー、アイデンティティといった問題（［Nadesan1993］,［Hollup1994］,［川島 2006］,［Bass2013］等）に関してかなりの研究の蓄積がある。本稿ではこのような蓄積を踏まえ、紅茶プランテーション農園とその住環境の変遷を概観しつつ、具体的なフィールドにおける住環境の現状分析に重点を置く。政府や国際機関、NGO 等が推進する紅茶農園の社会開発において住環境は重要な柱とされている。しかし、「バンガロー」と呼ばれる管理・経営者の住宅と比較して、長屋等の労働者の住宅に関する研究は著しく限られている（［Dharmadasa1999］, ［Chandrabose & Sivapragasam2011］等）。これにはおそらく、紅茶農園に暮らしてきた人々が、様々な制約の中で、自らの境遇について語り得なかったことも関係している。従来の研究もまた、農園のタミル人社会の従属性を強調する傾向があった。

本稿ではまず、既往研究を踏まえ紅茶農園の変遷について、特に労働者の住環境（長屋）の扱いに着目した整理を行う。次に、長屋の標準プランの原型になったと思われる「設計指針」を示した資料（プランターズ・マニュアル）について分析し、さらに、長屋の住まいの現状把握を行い、原型と現状の比較検討を行う。それにより、主に物理的実態から、複雑な歴史に翻弄されながらもその時々の状況に対峙してきたタミルの人々と共にあり続けてきた長屋の住まい像を探る。

2. 旧紅茶プランテーション農園：バウラーナ村

2. 1. スリランカにおける紅茶プランテーション略史

スリランカに最初にプランテーションが導入されたのは、1824 年であった。当時、プランテーションでは主にコーヒーが栽培されていたが、1870 年頃から病気（さび病）が流行し、スリランカのコーヒー樹木は壊滅した。それと前後してスリランカでも茶葉の栽培が行われ、1867 年にはスリランカで初めて商業的な栽培が開始された。19 世紀初頭、コロンボ～キャンディ間は徒歩で片道 1 ヶ月という道のりであった。道中には伝染病、猛獣等、様々な危険が伴った。その後、1841 年には道路の舗装が完了し、1863～1867 年にかけてはコロンボ～キャンディを結ぶ鉄道が開通する。安全で迅速な交通手段の整備等を機に国土中央の中高地地帯におけるプランテーション農園の開発が進み、コーヒーから紅茶へと産業の転換が起こった。

紅茶の栽培にはコーヒーや他の作物よりも多くの単位面積あたり労働力を必要とする。また、茶葉の栽培や製品の加工には年中を通じての管理が必要である。このことから、それまでの季節移住ではなく、農園への住み込みによる労働の確保が必須となった。しかし、政府から土地を購入したイギリス人経営者は労働力の確保に難儀する。と言うのも、地元のシンハラ人農民は紅茶農園の厳しい労働を敬遠するきらいがあった。また、シンハラ人農民は地主を頂点とする封建的管理体制に既に組み込まれており、彼らを労働力とすることは困難であった。そこで、農園経営者たちが眼をつけたのが南インドのタミル人であった。移民の募集にあたって、「カンガーニ」と呼ばれる移民仲介人たちが任命され、彼らを中心として村ごとにスリランカへと移民した。そして、スリランカに渡った後も、南インドでの出身の村や親族ごとにまとめられ、農園の労働に従事した。

なお、イギリス植民地で 19 世紀初頭までみられた奴隷制度は既に廃止されていた

こともあり、タミル人のスリランカへの移住は強制的ではなかったという見方もできる。ただ、道中の危険や農園での過酷な労働は、現代で言う「人権」という視点を欠いていた。また、スリランカ側に大量の安価な労働力確保というプル要因があったように、南インド側にもプッシュ要因が存在した。彼らの多くはもともとインドの厳格なカースト社会において抑圧・疎外されてきた人々であった。また、当時の南インドは 19 世紀最大の飢饉とも言われるオリッサ飢饉（1866～1868 年飢饉）等、度重なる飢饉によって深刻な食糧難に陥っていた。そのような厳しい状況に置かれていた彼らがスリランカの紅茶農園に新天地として希望を見出したとしても不思議ではない。

このような背景のもと、南インドにおいてカースト制度によって統合されていた社会秩序はスリランカの紅茶農園へと「平行移動」し［中村 1975, p.262］、さらに、ヨーロッパ的な生産効率重視の管理制度と結合することによって、紅茶農園の統治機構が完成したと言われる。1921 年には南インドからスリランカに渡ったタミル人の数は約 60 万人に上ると推計され、これは当時の総人口の 13.4％を占めるまでになっていた。

なお、スリランカ・タミルについては、変形させながらもカースト制度を維持しているが、インド・タミルについては、その 7 割が低カースト出身者であり、そのこともあって、インド的なカースト制度が機能していないという議論もある［鈴木 2013］。このことは、カーストや階層といった用語を使って農園社会の外側から安易な概念や図式にあてはめるのではなく、住み手自身の認識や彼らの社会関係に沿った理解が必要であることを示す重要な指摘である[4]。

イギリス植民地時代、紅茶プランテーション農園はそれぞれ農園主（多くはイギリス人の経営者）によって所有・管理されていた。スリランカは 1948 年に独立し、イギリス領セイロンから現在の体制となった。独立を機に、農園の国有化が検討され、1972 年には土地改革法が成立する。この法律をもとに農園は規模によって分類され、主に外国人が統治していた大規模な農園の多くが国有化された。国有化された農園は State Plantation Corporation: SLSPC、Janatha Estate Development Board: JEDB という 2 つの公社によって管理された。国有化によって、それまで農園主の個人的な領域であった紅茶農園の状況が表に出るようになり、政府や国際機関、NGO 等によって農園の社会開発プログラムが実施される。しかし、公社の要職に就いた人々は農園の経営や労働慣行に不慣れな人々であり、その多くが政治家との縁故によって選ばれていた。農園の経営能力は低下し、茶の生産も急激に低下した結果、茶の国際市

場の目がスリランカからインドやケニアへと移る一つの原因にもなったとされている［Nadesan1993, p.223］。紅茶農園の状況は一向に改善されず、生産性の低下が指摘されると、1990年頃からは国際金融機関の支援を受けて2つの公社の民営化改革が推進される。しかし、この民営化改革も不完全なものに終わり、農園の社会開発と生産性向上に対して根本的な対策は実現していない。

農園に暮らすタミル人は現在に至るまで紅茶産業の底辺に置かれ、様々な苦境に晒されながらも紅茶産業を陰で支えてきた。彼らをめぐる苦境の最たるものが無国籍問題である。イギリス植民地時代は農園に暮らすタミル人もシンハラ人やスリランカ・タミル人と同じく、「イギリス領セイロン人」という位置づけであり、立場は安定していた。しかし、独立後は無国籍状態となり、国内外の移動の自由が制限され、公共サービスからも排除される。皮肉なことに、農園のタミル人は独立を機にかえって不安定な立場に陥ったのであった。1960年代から1970年代にかけてシンハラ・ナショナリズムを掲げる過激派組織によってインド・タミルがスリランカ・タミルと一括りにされ排斥運動が激化した。そのような中、インド・タミルの処遇をめぐってインド、スリランカの両政府間で交渉が行われるが、交渉は膠着状態に陥る。無国籍問題が一応の解決に至ったのはようやく、2003年になってからであった。その間も1980年代から続く内戦の影響によって差別・暴力や移動への制約等が続くが、2008年の内戦終結後は移動がようやく自由となった。

スリランカ政府は現在、紅茶農園に暮らす人々への社会保障の整備や社会開発プロジェクトを推進し、紅茶産業の貴重な労働力であるタミル人を農園に留めておこうとしている。しかし、農園の生活環境や公共サービスへのアクセスの改善が遅々として進まない。そんな中、移動の自由を手にしたタミル人にとって農園に暮らし、厳しい労働に従事し続けることは魅力が乏しい。特に若い世代の中には海外への出稼ぎやコロンボをはじめとする都市部での就職をめざす者も現れている。

2．2．バウラーナ村の歴史（口述史）

バウラーナ村（Bawlana,中部州キャンディ県デルトタ郡）は、キャンディから、中央高地（標高約1000～2000m）の世界的に有名な紅茶産地（ヌワラエリア、ウバ等）へと向かう途中に位置する。キャンディは、かつて存在したキャンディ王国（1469年～1815年）の最後の都であり現在は中央州の州都である。バウラーナ村はスリランカで最初に商業的な紅茶栽培が行われたルールコンデラ（Loolecondera）農園からほど

近く、スリランカでも最初期に開設された紅茶プランテーション農園である。農園としては既に閉鎖されており、現在はかつて紅茶生産に従事した労働者やその子孫が暮らしている。筆者らはバウラーナ村で住民への支援活動を行っている現地NGOの活動に 2014 年頃から参加し、住民や地元行政と連携しながら長屋の再生や地域ツーリズムの拠点づくりに関わってきた［前田・大庭 2016］。筆者らがバウラーナ村に関わり始めたのは偶然であるとは言え、同村がいち早く衰退を経験し、かつ紅茶プランテーション農園として閉鎖された後もかつての労働者が暮らし続けているという事実は興味深い。彼らが今もなぜ、どのように暮らしているのか知ることはスリランカの他の紅茶農園の将来を探る上でも参考になると考えている。

バウラーナ村の歴史については公式の記録が残されていない。そこで、同村で生まれ育ち、農園が閉鎖されるまで紅茶生産に従事していた古老（2014 年当時、69 歳）へのインタビューをもとに、村の歴史を以下の通り口述史としてまとめた。

バウラーナ村は 1883 年に紅茶プランテーション農園 Bawlana Tea Estate として開設された。1948 年にスリランカがイギリスから独立した後、1954 年には農園の経営会社が複数の民間会社に分割・売却された。これは、当時の経営者（イギリス人）がスリランカから撤退するにあたり、企業（古老の話によると海外の企業）に権利を売り渡したものと推測される。その後、1958 年には、紅茶加工工場が焼失するという事件が起こる。当時の紅茶農園経営会社に対して労働者は不満を募らせていた。抗議と待遇改善の要求のために、労働者たちがボヤ騒ぎを起こそうとしたところ、誤って工場全体に火が燃え広がってしまったという。1978 年には先述した国の政策によりバウラーナ村の紅茶農園も国有化されるが、1980 年には紅茶農園が閉鎖される。その後も村

図 2 バウラーナ村の風景（左）と村内に残る長屋（右）

は住環境としては存続し、水路等のインフラ整備が行われる。また、政府によって香辛料や林業等、紅茶に代わる新たな産業の導入も試みられる。しかし、村人の話によると、それらはどれも軌道に乗らず、失敗に終わったという。また、1990年代以降は、松の植林を行い、松ヤニの採取や林業といった新たな産業の導入が図られる。村にはじめて電力網が引かれるなどのインフラ改善も行われた。しかし、林業もやはり軌道には乗っていない。逆に、植林の影響により、村では生活や農業に必要な水の不足が深刻になるなど、新たな問題も発生している。

現在、バウラーナ村では、かつて一帯にみられたような茶畑ではなく、松の植林による人工林や耕作放棄地が拡がっている。そのような風景のなかにかつての労働者長屋や紅茶産業関連施設が点在している（図2）。村の人口について詳細な統計・資料がなく、正確な数値は不明であるが、村人の話等を踏まえると、およそ 1.5 ㎢ほどの範囲に600名から700名ほどの住民が暮らしているようである。住民の多くは基本的に住居付近の畑や鶏・ヤギ・牛などの家畜により自給自足の暮らしを送っており、たまに近隣の都市へ日雇いの労働に出向いている。一方、若い世代の中には、特に近年は移動の自由が得られたこともあり、職を求めて都市部（コロンボ）や海外への出稼ぎに出る者が多くなっている。村を訪れると働き盛りの若者の姿は少なく、子どもや老人、出産・育児期の女性の姿がよく目に留まる。

3. 紅茶プランテーション労働者長屋の成立

3. 1. 紅茶プランテーション農園における環境整備

スリランカでは 1824 年からプランテーションが導入され、最初は主にコーヒー、その後は紅茶、ゴム、ココヤシの農園が開発されていった。1840 年、プランテーション農園開発を進めるために、イギリス・スリランカ政庁は土地法を制定する。この法律のもと、土地登記がなされていない土地は全て政府による接収の対象となった。なかでも「チェナ」と呼ばれる、焼畑による移動耕作地がかなりの面積を接収された。それらは在地のシンハラ人農民が管理・利用していた入会地であり、近代的な土地所有制度に照らしてみると所有権が曖昧な土地であった。接収された土地は、イギリス人プランターへと売却され、プランテーション農園として開発された。

紅茶プランテーションでは、管理者と労働者が農園に住み込み、年間を通して紅茶の栽培・生産に従事する。そのため、農園は労働・生活面での機能が自己完結し

ている。紅茶生産に必要な諸施設（生産・加工工場、管理事務所、倉庫・貯蔵施設等）に加え、管理者・労働者の生活に必要な諸機能（住居、医療、教育、宗教等）も農園内に整備された。このような自己完結的な空間は、紅茶の効率的生産、労働力の節約的利用・再生産という一貫した目的のもと統合されていた。イギリス人経営者をトップとして、末端のタミル人労働者を「カンガーニ」と呼ばれる管理補助者が従えるツリー状の労働管理体制が構築された。階層間の上下関係は強化され、その一方で、階層内の人間関係は分断されていた［鈴木 2008, pp.53-56］。

このような関係性は組織・体制の面だけでなく、住居の配置や身に付ける衣類、慣行など、物理的・空間的な面にも現れていた。例えば、住居の配置について、イギリス人管理者が住む「バンガロー」と呼ばれる庭付きの邸宅が農園中央の小高い丘の上に配置され、周辺の茶畑や労働者が住む長屋を管理者が常に監視していた。また、農園内の長屋はカースト別に供給され、労働者の中でも高位カーストの人々は農園中心部にある管理事務所や管理者が住むバンガローの近くに住む傾向があったと言われる［Bass2013, p.40］。このような体制は今から 1 世紀以上前に完成したものであるが、現役の農園では基本的な構造は今も変わっていない。

3．2．紅茶プランテーション農園労働者の住環境の変遷

スリランカ中央山岳地帯奥地の山林が開拓され、プランテーションが開設された当初、労働者の住居は木と土でできた仮設的な構造物であったとされている［Dharmadasa1999, pp.9-11］。その後、プランテーションの発展とともに石のブロックやレンガ、鉄製のシート等を用いた恒久的な構造物に変化していった。部屋の大きさやベランダの設置といった長屋の仕様について、当時からある程度の共通点はあったと思われる。しかし、イギリス植民地時代のプランテーション農園は農園主の私的な領域であり、労働者住宅の仕様も基本的に、イギリス人農園経営者それぞれの意向に沿ったものであった。

1948 年の独立後、プランテーション農園の国営化が進められる中で、1972 年・1976 年の土地改革以降は、SLSPC や JEDB といった公社を中心とした社会福祉プログラム、住宅改善等の公的介入が開始される。住宅改善では住宅の新規供給と既存住宅の改善が国際社会からの協力を得ながら行われ、二戸一タイプの「コテージ」と呼ばれる住宅も供給された。なかには、長屋を分割し、複数のコテージとして利用するという改修も行われた。

1990 年代初頭、JEDB と SLSPC は民営化され、Plantation Restructuring Unit : PRU、Regional Plantation Enterprises : RPEs と呼ばれる組織が設立され、大部分の農園の管理が委譲された。また、Plantation Housing and Social Welfare Trust : PHSWT と呼ばれる非営利の組織によって引き続き農園の住環境、社会福祉の改善プログラムが進められる。このプログラムでは自助建設方式による住宅建設・改善が約 120 箇所の農園で実施され、計約 6000 戸の住宅が新築もしくは改修された。また、当時設立され National Housing Development Authority：NHDA が全国各地で推進していた自助住宅建設（Aided Self-help Housing：ASH）のプログラムもプランテーション農園に適用され、コアハウジング（Core Housing）方式[5]で住宅が供給された。

自助建設方式による住宅供給は労働者の主体性、尊厳を回復するという点で重要であったと思われるが、一方で、デリケートな問題も含んでいた。キャンディ周辺のシンハラ人土地なし農民の間には、イギリス植民地時代に自分たちが先祖代々受け継いできた土地を奪われたという認識があり、その土地が農園のタミル人のものになることに根強い不信があったのである［川島 2006, p.159,鈴木 2008, pp.35-36］。

このように、特に 1972 年・1976 年の土地改革以降、プランテーション農園に公的介入が開始されてから数々の住環境改善の試みがなされてきたが、その効果は限定的であったと言われる［Chandrabose&Sivapragasam2011, pp.25-28］。プランテーション農園労働者の約 56.1%がいまだにイギリス植民地時代の長屋に居住しており、健康管理の不足、低体重で生まれてくる子どもの多さ等から、住環境の“劣悪さ”が指摘されている。特に、長屋の住居は狭小かつ過密、湿気や煙が多く、暗い等、健康への悪影響が強調されている。また、狭小な菜園や家畜小屋、排水溝、共同トイレが長屋の周囲の狭小な空間に配されていることも“劣悪な住環境”の一因になっているとされている。

政府による計画においても、長屋は、プライバシー、適切な換気システム、安定的な水供給、衛生設備が欠如した、“劣悪な住環境”とされている。政府は New Life Housing Programme という住宅供給プログラムを掲げ、そこでは住戸面積 550 ft²（＊1 ft²＝約 0.093 ㎡）、敷地面積 7 パーチ（＊スリランカの土地の単位で、1 パーチ=約 25.3 ㎡）の戸建て住宅を 5 年間で約 18.9 万戸供給する計画である。既存の長屋では 200 ft²ほどの住戸に一家族が住んでおり、長屋周辺の土地は共同利用されているが、無秩序な土地利用が地滑り災害の一因にもなっていると指摘されている。政府

は住環境、防災といった視点から Cluster Village Model という再定住地計画を作成し、2016 年までに当初目標のうち約 3 万戸の供給を達成している。一方で、今後のさらなる推進に向けては財源の問題、ガバナンスの問題を抱えている[6]。

3．3. プランターズ・マニュアル等にみる長屋の計画・設計

政府の改善計画等では長屋の住環境について、ここまでみてきた通り、その“劣悪さ”が強調されている。その是非についてここでは判断を一旦保留するが、長屋はそもそも、建設当初、どのような考えのもと計画・設計されたのであろうか。長屋の仕様は、建設と管理の効率性を考慮して、ある程度、標準化されていたと考えられる。1950 年の法律では、リビング、ベランダ、台所等の部屋の構成や周辺環境についての規定が示されている［Chandrabose&Sivapragasam2011, pp.21-22］。1978 年の法律でも、それらが実際に適用・実施されたかは別として、住居を含む農園労働者の適切な生活水準について統一的な指標が示されている。一方、イギリス植民地時代には、長屋を含むプランテーション農園建築の仕様は農園主それぞれの裁量で決定されていたためか、統一的な基準は管見の限り見当たらない。ただし、プランター向けのマニュアルの類が出版されており、当初、プランテーション農園の建設に際して参照されていたと考えられる。ここでは、筆者がセイロン紅茶博物館資料室で収集した資料のうち、長屋の建築について詳細な記述がある以下の 2 つの資料についてみていく。

・E.C.Elliott & F.J.Whitehead : *Tea Planting in Ceylon*, 1931

本書では、スリランカにおける紅茶プランテーション産業の沿革とともに、当時の最新技術を紹介している。プランテーション農園を紅茶生産を合理化する「自己完結的な単位」と捉えている。一方で、スリランカの国土は気候や標高、土壌等、多様な条件があることから、地域性（低地、中地、高地に分類）に適合した形での環境整備が必須であることも説いている。管理者の邸宅であるバンガローに関しては、茶畑や労働者の住居が監視しやすい立地が奨励されているが、住宅の間取りなどの計画は居住者の好みや環境によるという簡潔な記述に留まっている。長屋については、その仕様やコスト、設計例の図面（図 3）が記載されている。

配置：シングルタイプ（一列状）の長屋は土地の制約が大きい急傾斜地に適する。南西からの強いモンスーンをまともに受けることを避けるような住棟配置が理想であ

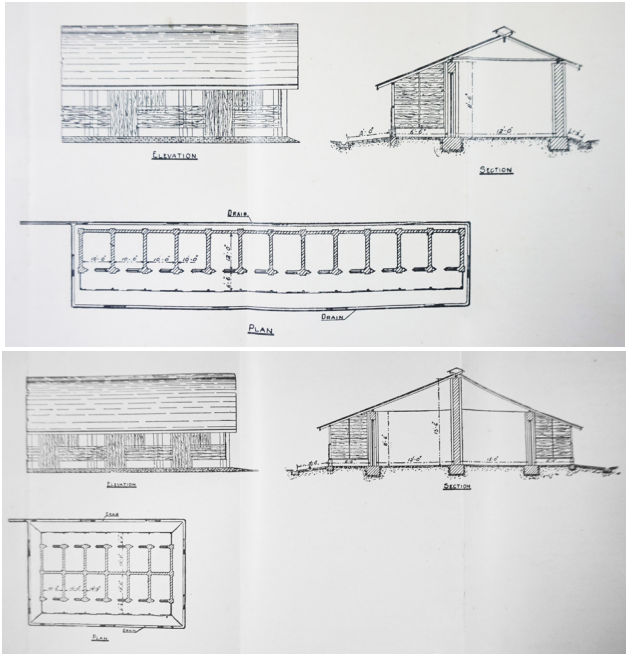

図3 労働者長屋設計例（上：シングル、下：ダブル）［Elliott&Whitehead1931］

る。住棟間隔は、最低でも40ft（＊1ft=約0.305m）とする。

構造・素材：屋根の棟までの高さはシングルタイプの長屋で14ft以上、ダブルタイプ（棟割り）の長屋で18ft以上。風が強い高地ではそれぞれ12.5ft、14.5ftまでに抑える。壁と柱の高さは8.5ftまでとし、住戸間の仕切り壁は通風の確保のため壁・柱を越えない高さとする。屋根を葺く素材には寒い地域では木や瓦のこけら板が適するが、高地や中地では鉄製のシートが広く使われる（湿気が多い低地には向かない）。屋根のフレームには木材を用いる。壁には石もしくは煉瓦、カブック（cabook）と呼ばれる地元産のラテライトを用いたブロック等の恒久的素材が用いられる。両端の壁にはセメントや漆喰で固められた化粧石が用いられる。壁の厚さは15in（＊1in=約25.4mm）程度、部屋の大きさは内法で10ft×12ftフィートを確保する。間仕りには最も安価な素材である日干し煉瓦が使用されることが多い。

ベランダ空間：ベランダを設けることで各住戸が雨風から守られる。屋根の庇はベランダから2ft以上張り出す。高さ18inほどの小壁があるとなお良い。

換気・排水：屋根の棟には、端から端まで換気口（煙出）を設ける。換気口の隙間の大きさは 2〜4in。戸口の大きさは高さ 6ft、幅 2.5ft 以上。長屋の周囲は石やセメントなどの不浸透性の素材で舗装し水はけをよくする。舗装の幅はベランダの端から 5ft 以上。棟割り長屋の場合は両側を舗装する。シングルタイプの場合は正面だけでもよいが、雨風の浸食を防ぐために背面にも幅 2〜3ft の幅で舗装するとよい。

・R.Garnier: *Ceylon Rubber Plantation Manual*, 1919

本書は、書名にあるゴム以外にも、紅茶、ココナッツ等の作物のプランテーションにも適用可能なマニュアルである。建築の仕様に加え、管理上の注意点等についても詳細な記述がある。“よりよく作られ、管理された長屋は病気の予防、健全な労働力の維持に貢献する。「健全な長屋」が農園経営における支出の抑制にもつながる。”という考えが示されている。

敷地の選定：採光・通風に適し、水はけがよい土地で、地滑りなどの危険がある場所、不衛生な場所からは距離を置き、霧や湿気が留まりそうな場所も避ける。

ベランダ：長屋の周囲にベランダを設ける。建物の強度を上げるとともに、住民が長屋の端から端まで移動しやすくする。ベランダの幅は 6〜7ft 以上とし、風と光を室内に取り込むため壁等で塞いではいけない。ベランダの列柱の間に高さ 15〜18in 程度の壁を設ける。そうすることで雨や湿気の侵入を防げる。また、小さな子どもの転落などを防止し、快適かつ安全に遊ばせることができる。

部屋寸法：部屋の大きさは 12×10ft もしくは 12×12ft とする。

壁：1年に 2 回は漆喰で塗り直す。壁塗りの材料には貝灰とスリランカでとれる黄土を混ぜるとよい。柱や扉もシロアリの被害を防ぐため塗装する。各住戸の扉の上に 2×2ft 程度の大きさの換気口を設ける。

衛生：各住戸の煙出しを屋根に設ける。長屋の周囲を排水のため舗装する。石を敷き詰めてセメントで固める。舗装はベランダから 4〜5ft のところまで行う。

水供給：飲料水・生活用水の確保。湧き水や井戸から引水する場合、水の浄化や汚染の防止には十分に注意を払う。コレラ等の伝染病が万が一発生した場合は、管轄部署の指示に従って水源を消毒する。

管理：清掃人を雇い、最低でも一日一回は長屋と周辺環境を掃除し、排泄物やゴミを処分する。長屋 8 棟につき 1 人以上の清掃人を配置する。長屋の周囲 15ft は毎

日掃き清める。その範囲内での野菜の栽培も禁止し、土壌を強固に保つ。さらに、長屋の周囲 200ft までの範囲は白い柱で目印を示し、空き瓶や空き缶、ココナッツの殻などのゴミが溜まらないようにする。

周辺：長屋の周囲 15ft にはいかなる建物の建設も認めない。ただし、動物性のタンパク質は労働者の健康維持に重要なのでヤギや牛、豚などの家畜の飼育は奨励される。20～30ft 離れたところであれば小屋の建設を許可する。また、野菜の栽培に関しても 15ft より外側であれば許可される。

トイレ：大人 15 名に対して 1 箇所設ける（子どもは 1 名を大人 0.5 名としてカウント）。男女でトイレは区別する。伝染病予防のため土壌を汚染から守る。労働者にはトイレを使用すること、掃除を徹底することを教育する。

その他：全ての長屋を週に最低でも二回は見廻り、上述の規制が守られているか確認することは農園の管理者にとって義務である。

なお、上記のマニュアル［Elliott&Whitehead1931］では「政府の基準によると～」という記述が数箇所みられるが、この「基準」が何を指すのかは不明であった。1926 年に記された同種のマニュアル［Nicholas1926］にも「政府標準の労働者長屋」の写真（図 4）が掲載されており、この時期に何らかの基準ができていた可能性がある。

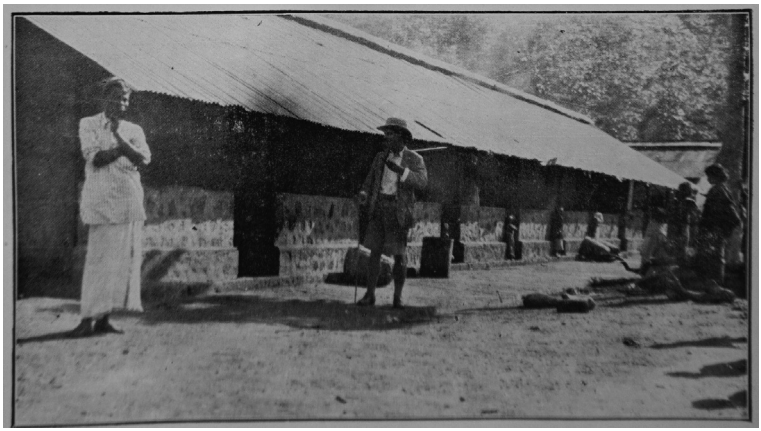

図 4 “政府標準”の長屋の写真［Nicholas1926］

4. バウラーナ村における労働者長屋の特徴と住み方の現状

4. 1. バウラーナ村の長屋の現状と特徴

バウラーナ村には 2018 年現在、長屋が計 13 棟ある。村人の話や村の航空写真から、以前は 15～20 棟ほどあったと推測されるが、一部の長屋は空き家化や老朽化の結果、失われており、今は廃墟や基礎の跡だけが残されている。現存する長屋は老朽化が激しく破損している箇所もみられるが、住民によって手が加えられることで維持されている。長屋が建つ土地は政府の所有であるが、かつての労働者とその子孫が住む場合に限り、使用の継続が許可されている。既往研究［Chandrabose & Sivapragasam2011, pp.20-21］によると、長屋には①ダブルタイプ（棟に沿って住戸を背割りした長屋）、②シングルタイプ（前面にベランダ）、③シングルタイプ（前後にベランダ）という 3 つのタイプがある。バウラーナ村で確認されたのは、①が 6 棟、②が 6 棟、③が 1 棟であった [7]。住人の話によると長屋はいずれもイギリス植民地時代に建てられたものである。

配置：管理人のバンガロー（現在は廃墟）や工場（跡地）を中心としてかつての茶畑の中に分散して配置されている。尾根線や斜面の限られた土地を使っている。敷地条件からの制約が大きいためか、建物配置の方位に特に法則性はなく、南西モンスーンへの対策は特にみられなかった。屋根の棟までの高さは 14.7 フィートであり、これはマニュアル［Elliott1931, p.228］で示された高さに概ね納まっている。

平面：居室＋ベランダで一戸が構成される（図 5）。部屋の大きさは居室が 9.8~11.2ft×10.2~12.5ft、ベランダが 9.8~11.2ft×5.6~6.6ft であった。これはマニュアルに記載された寸法、すなわち、居室：10ft×12ft［Elliott1931, p.229］、居室：10~12ft×12ft、ベランダ幅：6~7ft［Garnier1919, p.107］に近いか、やや下回っているとも捉えられる。

構造・素材：長屋の主要構造には鉄と石・煉瓦が用いられている。屋根を支えるフレームは鉄製である（図 6）。フレームに刻まれた刻印から 1857 年以降に製造されたものであると推測される [8]。長屋の両端の壁には地元産の black stone と呼ばれる石が用いられている。直方体に整形されて積み上げられ、壁の厚さは 400mm ほどある。これはマニュアル［Elliott1931, p.229］で示された数値（15in=約 380mm）とほぼ一致する。住戸間の間仕切り壁には煉瓦が用いられている。壁の表面は室内・室外ともに漆喰で仕上げられ、床は牛糞を用いた土間である。ただ、後述するように、最近は化

学塗料によるペイントやタイルに変更されている場合も多い。

衛生：屋根の棟に煙出しのための換気口がある。調理には薪を使っている家庭が多く、台所からの煙は屋根裏を通って換気口から排出される。近年はプロパンガスが普及し、ガスコンロを導入する家庭もみられるが、薪での調理が主である。長屋の周

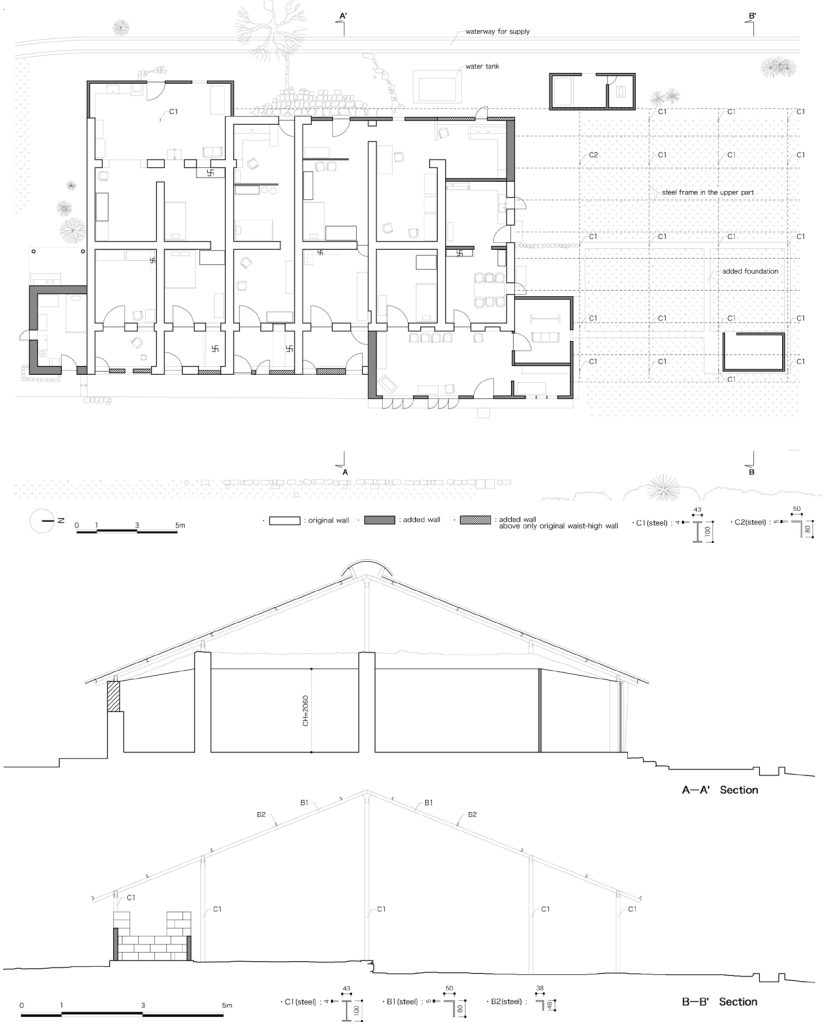

図5 バウラーナ村の長屋 実測例

囲には石が敷き詰められ舗装されている。

水供給：周囲の山の湧き水を高低差を利用して引き込み、各長屋に配水している。長屋の脇に水路が引かれ、各家庭はそこから取水し、飲用にはプラスチック製のタンクにためている。季節によっては水の確保が困難な時期もある。

周辺：長屋の周辺は畑として耕され、家畜小屋等も建てられている。また、各住戸

鉄製の屋根フレーム

厚さ 400mm の壁

牛糞を用いた土間の床

化粧石を使った建物両端の壁

“EARL OF DUDLEY STEEL”の刻印が刻まれた鉄骨柱

図 6 長屋の構造と素材

の近くに台所やトイレを建てることもある。

浴室・トイレ：専用の浴室・トイレはなく、長屋の周囲に共同の小さな浴場スペースやトイレが建てられている。

バウラーナ村の長屋の仕様には基本的に、先述したマニュアルに記載された標準仕様と共通するところが多い。一方で、鉄製の屋根フレームや分厚い石積みの壁はマニュアルにはない仕様であり、バウラーナ村の長屋の特徴であると考えられる。

4. 2. 長屋の住み手

バウラーナ村の長屋計 13 棟のうち、調査が可能であった 10 棟には計 48 世帯・210 人が居住している。増改築が繰り返され複数住戸が一戸として統合されるなど、建設当初の住戸の単位が崩れてきている。現在の住戸の単位をベースとすると、一戸あたりの居住人数は約 4.4 人であり、エステート部門平均 4.0 人［DCS2016］をやや上回っている。一戸あたりの面積は約 455ft²（=42.3 ㎡）であり、内訳は、100ft²未満:0（0%, 農園部門平均［DCS2016］:3.7%）、100ft²<250ft²:11（22.9%,同 34.0%）、250ft²<500ft²:19（39.6%,同 35.1%）、500ft²<750ft²:9（18.8%,同 16.2%）、750ft²<1000ft²:8（16.7%,同 6.8%）、1000ft²以上:1（2.1%,同 4.1%）であった。農園部門平均や政府が定める平均面積（約 200 ft²）よりも広い住戸が多い。これは、後述するように、住民自ら住戸を増改築し、面積を拡大していることが関係していると考えられる。

住民の年齢分布は、0～14 歳：24.3％、15～24 歳：17.6%、25～34 歳：15.2%、35～44 歳：10.5%、45～54 歳：10.5%、55～64 歳：9.5％、65 歳以上：12.4%であった。職業は、無職:48 人（34.8%）、国内出稼ぎ：32 人（23.2%）、野菜・家畜の世話：23 人（16.7%）、家政婦 10 人（7.2%）、日雇い労働：7 人（5.1%）、三輪タクシー運転手：6 人（4.3%）、店舗・工場勤務 5 人（3.6%）、海外出稼ぎ：4 人（2.9%）、紅茶農園勤務 2 人（1.4%）、その他 1 人（0.7%）であった。村の近辺には安定的な収入が得られる仕事の機会が少なく、無職（退職者、主婦含む）の次に多いのが国内最大の都市であるコロンボ等への出稼ぎである。最初は単身で都会に赴き、住み込みの従業員・労働者となるが、軌道に乗ると親・兄弟を呼び寄せたり、自ら店舗を構えて都会に居着くというケースもあるようである。また、2008 年の内戦終結後はタミル人の移動に対する制約がなくなり、海外へと出稼ぎに行く者も現れた。ただ、農園に暮らすタミル人に対する海外出稼ぎの仲介料は他の民族よりも割高である。また、渡航先で仕事がない、トラブルに巻き込まれる、といった問題も絶えないという［鹿毛 2014］。いずれにせよ、

紅茶プランテーション農園と言えば以前は外部から隔絶された世界であったが、近年は住人の出入りが活発になっており、人口の流動性が高まっている。

4. 3. 長屋の増改築と利用・管理

紅茶プランテーション農園では基本的に一室とベランダからなる一住戸が一世帯に対してあてがわれ、それが家族形態（核家族）を規定していたという指摘もある［Bass2013, p.40］。バウラーナ村の場合は、紅茶農園としては既に閉鎖されているので、住戸と家族の関係はかなり柔軟である。家族が増えた場合、隣や背後の住戸の間の壁を取り払い、もともとの複数住戸を一戸として使用する。長屋の住民はもともと家族・親戚であることが多いため、住民間の合意が得やすい。また、隣の住戸の住民が転出していった場合、そこを購入・賃借して増改築するというケースもある。長屋と土地の所有権はあくまで政府のものなので、住民間で住戸の所有・利用に関する

ベランダ：塞がれ、小窓が穿たれている

土でつくられたカマド、台所

↑ 石積みのアーチ窓

→ 塞がれたアーチ窓

図7　住民の手が加えられている長屋の建築要素の例

権利のようなものを独自に設定し、取引をしているようである。

ベランダに関して、前面や隣戸の間の開口部が壁で塞ぎ、居室の一部や台所、礼拝スペースとして使うケースがよくみられる。部屋の狭さを解消するために少しでもスペースを確保しようとしている。また、もともと窓や扉だったところも一部塞がれ、収納スペースとして使うというケースもみられる（図 7）。ベランダの閉塞には、スペースの確保という理由が大きいが、それに加え、タミル人の文化の影響もみられる。村人を支援するNGO職員の話では、ヒンドゥー教には家財や家畜など、大切なものを人目に触れないようにして守るという考え方があるようである。

建設から130年以上が経ち、長屋には鉄製屋根の腐朽など、老朽化している箇所も目立つ。住民が資金を出し合って修繕するなど、住民が自ら手を加え維持している。壁や床の仕上げには漆喰、土、牛糞といった自然の材料が使用され、頻繁に塗り直されている。壁の漆喰塗りは半年に 1 回程度、牛糞の土間は週に 1〜2 回の頻度で塗り直されるという。壁・床の塗り直しは建物の維持だけでなく宗教的な儀礼としても重要な意味を持っている。彼らは寺院に礼拝に行く際、身体とともに住居等の建物も清める。特に、台所はヒンドゥー教にとって神聖な場所である。そのため、常に清潔に保たれ、同じく神聖な存在である牛の糞を用いて床の状態が維持されている。一方、バウラーナ村でも近年は壁塗装用のペンキやタイル、コンクリートブロックといった建材が普及しており、新築・増改築された箇所に使用されている。特に、出稼ぎなどで財を蓄えた世帯は、上述したような現代の建材を用いながら自宅を大幅に増改築している。

5. おわりに：物理的実態からみた紅茶農園の住まい像

本稿では、スリランカの紅茶プランテーション農園の歴史、特に農園労働者の住環境整備の変遷と長屋の成立について整理を行った。また、長屋の原型（プランター向けマニュアルに記載された標準設計）と現状（旧紅茶農園・バウラーナ村の長屋）を比較検討し、主に物理的実態から紅茶農園におけるタミルの人々の住まい像を探った。

紅茶プランテーション農園の長屋は建築当初、その仕様や管理において衛生的な環境を維持することにかなりの注意が払われていたことが明らかとなった。これにはもちろん、生産施設としてのプランテーション農園の性格上、労働者の健康の維持

が紅茶生産の能率の維持・向上に直結するという合理的な理由があった。現在、政府の計画では長屋の住環境の“劣悪さ”が強調されているが、上述のような生産施設としての性格上、建設当初から住環境への配慮が欠如していたとは考えにくい。問題があるとすれば、建物・設備の老朽化による機能の低下である。また、労働者としての住民の管理を目的としたことによる、当時の最低限の建築水準と現代の生活に求められる建築水準のミスマッチや、住民間の関係性の分断といった社会への影響であろう。本稿の分析結果を踏まえた筆者の見解としては、後でも述べるように、現在の長屋の住環境についても政府が言う“劣悪な住環境”という表現で一括りに捉えることには大いに疑問がある。

バウラーナ村の長屋の仕様（住戸の構成、寸法等）は、当時のプランターズ・マニュアルにほぼ準拠していたと捉えられる。同村の長屋の建設時期は1880年代と推測され、これが正しければ本稿で分析したマニュアルの出版に先んじていることになる。このことから、同村にみられるような長屋の特徴が、その後の標準設計の原型になったとも考えられる。一方、鉄製の屋根フレームはマニュアルにみられない仕様であり、これはバウラーナ村の長屋の特性であると考えられる。

また、長屋の壁や床の仕上げには漆喰や土、牛糞といった自然の材料が用いられている。これらは住民の日常生活や宗教的儀礼と密接に結びついていることから、現在も頻繁に塗り直しや材料の更新が行われていた。また、空き住戸の住民間の非公式な取引や複数住戸の一住戸化等の増改築行為が頻繁に行われていた。これには紅茶農園としては既に閉鎖し、生産施設としての役割を終えたバウラーナ村特有の事情もあるが、一家族あたりの住戸面積にはかなりの余裕が生まれていた。

以上のように本稿では、バウラーナ村の長屋の物理的な特徴を示した。また、バウラーナ村の特殊事情があるとは言え、長屋の住環境は、住民たちの生活の現状に見合った形で手が加えられ維持・更新されていることについても示した。これは、政府の社会開発計画で強調されている“劣悪な住環境”とは大きく異なる、“住民によって維持管理された”、農園の住まい像を示していると言えないだろうか。

バウラーナ村では紅茶農園閉鎖後もかつての農園労働者とその子孫たちが暮らし続けている。紅茶プランテーション農園は元来、生産を目的としてつくられた施設であり、立地や環境の面で生活には必ずしも適さない。それでもタミルの人々が村に留まる理由とは何であろうか。

かつて紅茶農園において住民の生活は農園主によって管理されていた。また、長らく無国籍状態のまま公共サービスからも疎外されてきた。彼らにとって、紅茶農園以外の場所に住居を移動することは現実的に困難であったが、近年、移動はかなり自由になってきている。そのような中でも、バウラーナ村の長屋は、住民によって頻繁に手が加えられ、大切に維持管理されている様子が窺えた。出稼ぎ等で国内外へ一度出た者にとって村と長屋は帰る場所となっており、出稼ぎで得た収入を村外への移住ではなく、長屋の改修に充てるようなケースもままみられる。このように、紅茶プランテーションをめぐる複雑な歴史に翻弄され続けてきたタミル人にとって長屋の住まいは現在も“安心できる場所”、“帰るべき場所”としての意味を持っているのかもしれない。このようなことを検証する上では、長屋の住民の認識や社会関係といった、社会的・文化的側面からの分析を積み重ねる必要がある。この点については本稿の分析の範囲を超えるため、今後の研究課題としたい。

政府の方針では、プランテーション農園の経営・管理上の都合から、住民の再定住が計画されている。しかし、移動の自由をようやく手に入れた紅茶農園のタミル人にとって、政府から充てがわれた住居が、本稿でみてきた長屋のような、安心できる場所、能動的に関われる対象としての住まいを阻害しているようであれば、彼らを「労働者」として農園に留めておきたいという政府の意図は実現し難いであろう。

---

[1] プランテーションとは輸出を前提として単一作物を大量生産するための制度であり、19 世紀からヨーロッパ諸国による植民地に導入された。この制度の大前提として、安価な労働力の導入が不可欠であり、当初は奴隷を移入していたが、19 世紀後半からは奴隷から季節労働者、そして移民労働者へと代わっていった。

[2] スリランカの民族別人口はシンハラ人（74.9%）、タミル人（15.3%）、スリランカ・ムーア人（9.3%）、その他（0.5%）である。タミル人はさらに、紀元前後にインドから渡来したスリランカ・タミル人と 19 世紀以降に南インドから流入したインド・タミル人に区別される。インド・タミルは主に農園労働者であり、農園タミルと呼ばれるが、スリランカ社会では農園（estate）という言葉に侮蔑的な意味が込められることがある。そのため、近年は「インド起源のタミル人」（Tamils of Indian Origin）や「高地タミル人」（Malaiha Tamils）という呼称もみられる。

[3] プランテーションの社会開発を主管する Ministry of Hill Country New Villages, Infrastructure and Community Development による、National Plan of Action for the Social Development of the Plantation Community 2016-2020 という計画。

[4] 鈴木は、インド・タミルに関する既往研究［Hollup1994 等］の中で、農園では異なるカーストの者も一様に農園労働に従事し長屋に隣り合って暮らすという環境において、ある種の均質性

や平等主義的傾向がみられ、カーストにまつわる諸事項が南インドのような厳格さを欠いているという指摘がなされていることを紹介している。一方で、それらの研究が、カースト制度が根本的な部分では変化していないという結論に至っていること、認識の方法も既存の図式の範疇を出ていないことを指摘している。

[5] コアハウジングとは、トイレやキッチン等の水回り、外壁や屋根等のシェルターといった基本部分のみを建設した住宅であり、住民が入居後、資力や必要に応じて自力で増改築を行う。1960 年代以降、途上国で深刻化する住宅問題に対応するために開発された供給方式であり、特にアジア・中南米諸国に広く普及し、スリランカでも導入された。

[6] 紅茶プランテーション農園の中でも特にヌワラ・エリヤやバドゥーラ等の高地にある農園は、農園開発のために人が住むようになった地域であるため、行政官がそもそも不足している。それ以外の地域でも、行政区と PHDT の間の連携の不足や、社会開発の受け皿となるべき住民組織の不在が問題として指摘されている。

[7] 13 棟のうち 2 棟は、②のタイプが水路と通路を挟んで対面する配置であった。また、①のタイプのうち 1 棟は、一部の部屋と屋根フレームを残して、ほとんど取り壊されていた。

[8] 長屋の鉄骨柱に“EARL OF DUDLEY STEEL”という刻印があった。［Birch1967］には“Round Oak Steelworks was founded by Lord Ward, later the Earl of Dudley in 1857.”と書かれていることから、この鉄骨は 1857 年に鉄骨工場が Dudley 伯爵の所有になった後に生産されたと考えられる。James Taylor がスリランカで初めて紅茶農園をバウラーナ村近くのルールコンデラ農園で始めたのが 1865 年、村の古老によるバウラーナ村で紅茶農園が開設されたのが 1883 年なので、鉄骨の製造時期と紅茶農園の開設時期は概ね一致している。

<参考文献>

Bass, D. *Everyday Ethnicity in Sri Lanka -Up-country Tamil Identity Politics*, Routledge, 2013.

Birch, A. *Economic History of the British Iron and Steel Industry*, Frank Cass & Co. Ltd.,1967.

Breckenridge, S. N. *The Hills of Paradise : British Enterprise and the Story of Plantation Growth in Sri Lanka,* Stamford Lake, 2001.

Chandrabose, A.S. and Sivapragasam, P.P. *Red Colour of Tea : Central Issues that Impact the Tea Plantation Community in Sri Lanka*, Human Development Organization (HDO) , 2011.

Department of Census and Statistics（DCS）. *Household Income and Expenditure Survey 2009*.

Department of Census and Statistics（DCS）. *Household Income and Expenditure Survey 2016*.

Dharmadasa, W. *A Study on Housing of Tamil Estate Workers in Sri Lanka: From Colonial Period to Date, B.SC Thesis*, Faculty of Architecture, University of Moratuwa, 1999.

Elliott, E.C. & Whitehead, F.J. *Tea Planting in Ceylon*, 2nd ed.on, the Times of Ceylon Co.,Ltd, 1931.

Garnier, R. *Ceylon Rubber Plantation Manual*, the Times of Ceylon Co.,Ltd, 1919.

Hollup, O. *Bonded Labour : Caste and Cultural Identity Among Tamil Plantation Workers in Sri Lanka*, Sterling Pub Private Ltd, 1994.

Ministry of Hill Country New Villages, Infrastructure and Community Development. *National Plan of Action for the Social Development of the Plantation Community 2016-2020*, 2016.

Nadesan, S. *A History of the Upcountry Tamil People in Sri Lanka*, A Nandalala Publication, 1993.

Nicholas, S.E.N. *Planter's Handbook : Labour in Ceylon*, H.W. Cave & Co., 1926.

Weatherstone, J. *Pioneers 1825-1900 : The Early British Tea and Coffee Palnter*, Quiller Press, 1986.

鹿毛理恵『国際労働移動の経済的便益と社会的費用－スリランカの出稼ぎ女性家事労働者の実態調査』, 日本評論社, 2014

川島耕司『スリランカと民族－シンハラ・ナショナリズムの形成とマイノリティ集団』, 明石書店, 2006

栗原俊輔 「農園労働者コミュニティから市民のコミュニティへ―スリランカ紅茶プランテーション農園に居住するエステート・タミルのスリランカ市民への道のり」『宇都宮大学国際学部研究論集』, 第 38 号, pp.1-11, 2014

鈴木睦子『スリランカ紅茶産業の農園タミル人の社会開発―市民社会の役割』, 早稲田大学博士論文, 2008

鈴木晋介『つながりのジャーティヤ: スリランカの民族とカースト』, 法藏館, 2013
中村尚司『共同体の経済構造ー労働の蓄積と交換』, 新評論, 1975
前田昌弘, 大庭徹「未来を開くきっかけとしての建築ースリランカ旧紅茶農園長屋再生プロジェクト」『地域開発』, 第 613 号, pp.25-30, 2016